



夏休みを前に ～物の見方や考え方～

校長 猪俣 伸

早いもので一学期もあっという間に過ぎ、来週24日には終業式を迎えます。

これまで各種行事などを通して、子どもたちがいきいきと活動している姿をたくさん見ることができました。特に、記念運動会でのバルーンが一齐に青空に向かって飛んでいった瞬間の子どもたちの歓声と表情は今でも目に浮かびます。



さて、7月の全校朝会で「命の大切さ」について話しました。これまでも、命の尊さ、大切さについて幾度となく話してきましたが、今回は「蝉の一生」をもとに話しました。はじめに、蝉の卵はどこで産むのか質問しました。すると、ほとんどの子が「土の中」と答えました。実は蝉の卵は木の幹に産み、その後、孵化（ふか）を始め、未成熟な幼虫のまま、土を目指して木を降りていきます。



やっとの思いで土の中に潜っても身動きが取れないため、「モグラ」「ケラ」などに襲われることもあります。土の中で過ごす期間は種類によって異なりますが3年～17年と言われています。全国的に多く生息しているアブラゼミは6年だそうです。土の中で過ごす期間の長さに子どもたちは驚いていました。

さらに、成虫になった蝉はどのくらい生きられるかの質問には、発言した全ての子どもたちが「一週間」と答えました。「約1ヵ月～1ヵ月半です」と言うと、子どもたちは、さらに驚いた表情を見せました。

* 蝉は昆虫の中でも飼育するのが大変難しく、一週間以内に死んでしまうことが多いので「一週間」という言葉が伝わっていったと言われています。私も子供の頃からそう思っていました。半世紀以上たった今も同じ考えに驚きます。

長い幼虫生活の後、やっと地上へ出て毎日危険です。蝉は天敵の多い昆虫で空を飛んでいると鳥に捕まり、木の樹液を吸っていると蜂に襲われ、木の間を通り抜けると蜘蛛の巣に引っかかってしまうケースが多くあります。さらに、人間（特に子ども）につかまえられ、死んでしまうことも多いのだそうです。セミには攻撃手段がなく昆虫の中でもとても弱い立場の生き物といえます。

私が蝉を取り上げたのには理由があります。

幼少の頃、親に虫かごと虫取り網を買って貰いました。嬉しくて夏休みに捕まえたアブラゼミを虫かごとに入れて親に見せたら、一言「蝉は一週間しか生きられないから逃がしてあげなさい」という想定外の言葉でした。仕方なく一匹だけ残し、あとは逃がしてやった記憶があります。その蝉も翌朝死んでいました。それからというもの、蝉を捕まえることに抵抗感ができました。



全校朝会プレゼン資料

また、親から言われた「一週間しか生きられない」という言葉も、数十年もの間ずっと信じてきました。あのとき、親から「良く捕ってきた。またいっぱい捕まえてこい」と言われていたらおそらく、毎日のように蝉を捕まえにいていたと思います。昆虫に興味をもっていろいろなことをさらに調べていたかもしれません。反面、蝉に限らず生き物を粗末に扱っていたかもしれません。どのような言葉掛けが一番よいのかは、なかなか難しい面があります。ただ、大人（親や教師、指導者等）の一言が子どもの物の見方や考え方を変えたり、豊かな心の成長に大きな影響を与えたりすることだけは確かだと思います。子どもたちには、最後に「虫を捕まえる体験も大切です」と話しました。

もうすぐ子どもたちが楽しみにしている長い夏休みに入ります。

現代の子どもたちは、映像には敏感でも文字や言葉から想像したり深く考えたりすることが苦手な傾向にあると言われています。この夏休み中、山や海などの大自然や動植物にしみながら、貴重な体験や経験をたくさん積み、豊かな想像力や思考力をより一層高めてほしいと思っています。また、自分の興味・関心のあることに挑戦させてもらいたいと思います。

ご家庭の皆様、どうか子どもの意欲や豊かな心をさらに高めて行くような助言や賞賛の言葉掛けをお願いします。そして、子どもたちが安全で元気に夏休みを過ごせますよう、交通事故や水難事故、熱中症等、未然防止に向けた注意喚起をお願いいたします。

二学期の始業式には全員明るい笑顔で登校してくることを楽しみにしています。